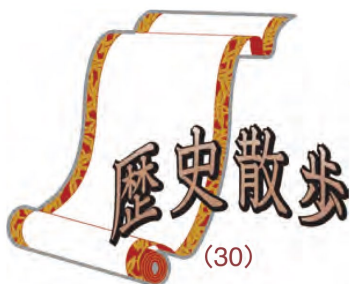


市指定史跡 藤堂家墓地



バス…三重交通バス「岩田橋」徒歩10分
車…伊勢自動車道津 I C から車で15分

戦国時代をその武勇と才覚で駆け抜け、数々の城郭造営に携りながら自らの生きる道を切り開き、津藩藩祖として津の町の礎を築いた藤堂高虎も、持病であった眼病の悪化と老衰には勝てず、寛永7(1630)年10月5日に江戸向柳原(現在の墨田区両国)の江戸藩邸で75年の生涯を閉じた。亡くなった時の記録に、亡きがらにはすき間のないほどに玉傷ややり傷があちこちにあつて、右手の薬指と小指は切れてつめがなく、左手の中指も少し短く、右足の親指もつめがなかったことが記されている。幾多の激しい戦をくぐり抜けてきた高虎の生涯を示す記録である。高虎の葬儀は、家康のブレーンとしてともに幕政に関わった天台宗大僧正天海が導師を務め、亡きがらは上野東叡山の寒松院に葬られた。今も各地に高虎の墓所・墓碑があり、津の寒松院もその1つである。

寿町の寒松院墓地には高さ4mにも達する大きな五輪塔が建っている。高虎墓碑の隣には松寿夫人(2代藩主高次母)、周囲には歴代藩主の墓碑が立ち並び、「藤堂家墓地」として津市の史跡に指定されている。寒松院は、当初昌泉院と称していたが、2代藩主高次が藩祖高虎の霊をまつようになってから、高虎の院号をとって寒松院と呼ばれるようになった。以後、この寺は藩主の菩提寺となって栄えたが、明治になって藤堂家の手を離れ、戦災を受けて堂宇が焼失してしまったため、現在は往時の面影はない。

このほかに、伊賀市の上行寺境内や京都府木津川市の旧寺院墓所の一角、また徳川家康の廟所である日光東照宮の近くにそれぞれ高虎の墓碑が残されている。

(「広報津」平成20年9月1日号)



津の藤堂家墓地の高虎墓碑